一般国道2号玉島バイパスの建設に伴う発掘調査報告書

41

島地貝塚

昭和56年2月

建設省岡山国道工事事務所
岡山県教育委員会
文化課

序

一般国道２号は大阪市を起点とし，瀬戸内海沿岸の主要な都市を経て，下関市に至る西日本の重要な幹線道路であり，建設省が管理しています。

岡山県内では，県南の主要都市，岡山・倉敷の両市街地を東西に貫通しています。

建設省岡山国道工事事務所では，この県南の主要都市の交通処理対策を主目的として岡山バイパス及び玉島バイパスを，一般国道２号の改築事業として計画し事業を施行しています。

このうち岡山バイパスについては，昭和38年度から事業に着手し，現在までに岡山市君津から倉敷市大西までの延長28.3kmが供用されるに至っています。

玉島バイパスは，倉敷市大西の岡山バイパスの西端を起点とし，同市玉島の市街地の北部を西進し，同市阿賀崎の現一般国道２号に接続する延長9.3km幅員20～36mの道路を建設しようとするものであり，昭和47年度から事業に着手し，既にほとんどの用地の取得を完了しています。

近年の交通量の増大に伴い，倉敷市玉島の市街地内の現一般国道２号の交通混雑は著しいものがあり，玉島バイパスの早期完成は，多方面から強く望まれています。当所としても，その要請に答えるべく，当面県道倉敷昭和線から都市計画道路柏島道越線の間，延長2.9kmを第１期として暫定的に供用開始するため，昭和54年度から改良工事に着手しています。

倉敷市玉島字八島地内に存する「島地貝塚」はこの玉島バイパスが，止むを得ず通過することとなった周知の埋蔵文化財包蔵地であり，取扱いについては，倉敷市教育委員会及び岡山県教育委員会と協議を進め，文化財保護法第57条の３の規定に基づき，文化庁へ通知した結果，事前に確認調査を行うことになったものです。

確認調査は，協議にあたって，豊富な専門知識により御指導頂きました岡山県教育委員会に委託して施行することになり，昭和55年度において確認調査及び全面発掘調査が実施されました。

本書は，この調査の結果を同委員会において編集して頂いたものであり，貴重な埋蔵文化財の実態を記録保存しようとするためのものです。

この貴重な記録が，文化財に対する認識と理解のため，及び教育並びに学術のために広く活用されることを期待するとともに，建設省の道路整備事業が文化財の保護に深い関心を持つものであり，道路財源が，このような部門にも活用されていることの理解が得られることを願いたいと考えます。

おわりに，事前の協議及び調査，報告書の編集にあたり，御協力頂きました岡山県教育委員会をはじめとする関係各位の御尽力に対し，深甚の謝意を表します。

昭 和 56 年 2 月

建設省岡山国道工事事務所

所　　長　結 城 康 雄

序

建設省において玉島バイパスを建設することになりましたが，周知の遺跡である島地貝塚を通ることになりました。そこで岡山県教育委員会は，建設省から委託を受け，発掘調査を行い記録保存の措置を取ることに致しました。

島地貝塚につきましては，県教委は新幹線建設工事に伴って発掘調査を実施しており，縄文時代から歴史時代にわたる遺物を検出しています。丘陵上の調査を加えた今回の調査でもほぼ同様の成果が上がっています。

発掘調査は，約２ヵ月間でしたが，実施にあたりましては，建設省中国地方建設局岡山国道工事事務所の方々をはじめ，地元作業員，対策委員各位から多大のご協力を賜わりました。ここに深く感謝の意を表するとともに，この報告書を今後の埋蔵文化財の保護と研究に役立てていただければ幸いと存じます。

昭和56年２月

岡山県教育委員会
教育長 佐藤章一

例　　言

1．本書は，建設省の委託により岡山県教育委員会が実施した一般国道２号線玉島バイパス建設に伴う倉敷市玉島八島に所在する島地貝塚の緊急発掘調査報告書である。

2．発掘調査は，昭和55年８月18日から10月29日まで実施し，文化課文化財保護主査伊藤　晃と同課文化財保護主事浅倉秀昭が担当した。

3．調査にあたっては，埋蔵文化財保護対策委員の各位より指導助言を得，また発掘作業は下記の方々の協力を得て行った。記して感謝の意を表したい。(順不同・敬略称)

対策委員　水内昌康，鎌木義昌，近藤義郎，西川　宏，間壁葭子，西岡憲一郎，根木　修　藤田憲司

発掘作業員　岡本　亀，小野輝男，小田満夫，亀山三喜三，田辺重太郎，古川鎮一，横溝鉄左ェ門

4．本報告書の執筆・編集は浅倉が行い，報告書の作成にあたっては，平井勝，山本悦世，禰木早苗，北村智子の協力を得た。

5．本書図１に使用した地形図は，国土地理院発行の２万５千分の１地形図（玉島）を複製したものであり，図２・３は岡山国道工事事務所作成の八島地区実施設計業務平面図（1000分の１）から作成したものである。

6．本書に使用した方位は真北を示し，レベルは海抜高である。

7．出土遺物及び写真・実測図は文化課分室において保管している。

目　　次

Ⅰ．はじめに …… 1
　1．位置と環境 …… 1
　2．調査に至る経過 …… 1
　3．調査経過と日誌 …… 2
Ⅱ．調査概要 …… 3
　1．トレンチ調査 …… 3
　2．海辺区 …… 5
　3．丘陵区 …… 5
Ⅲ．出土遺物 …… 5
　1．海辺区出土遺物 …… 5
　2．丘陵区出土遺物（トレンチ出土遺物も含む） …… 12
Ⅵ．むすび …… 18

図　目　次

図1．島地貝塚と周辺の遺跡 …… 1
図2．島地貝塚地形図 …… 2
図3．島地貝塚トレンチ設定図及び拡張区 …… 3
図4．島地貝塚T－15土層断面図 …… 4
図5．島地貝塚海辺区出土縄文式土器(1) …… 7
図6．島地貝塚海辺区出土縄文式土器(2) …… 9
図7．島地貝塚海辺区出土土器 …… 11
図8．島地貝塚丘陵区出土土器(1) …… 13
図9．島地貝塚丘陵区出土土器(2) …… 14
図10．島地貝塚丘陵区出土土器(3) …… 15
図11．島地貝塚丘陵区出土土器(4) …… 16
図12．島地貝塚丘陵区出土土器(5) …… 17
図13．島地貝塚丘陵区出土遺物 …… 18

図 版 目 次

図版１－１．島地遠景
　　２．島地近景とトレンチ
図版２－１．丘陵区表土除去作業
　　２．丘陵区発掘風景
図版３－１．丘陵区遺物出土状態
　　２．丘陵区調査後
図版４－１．海辺区トレンチ15
　　２．海辺区発掘風景
図版５－１．海辺区出土前期縄文式土器
　　２．海辺区出土中期縄文式土器
図版６－１．海辺区出土後期縄文式土器
　　２．海辺区出土晩期縄文式土器
図版７－１．海辺区出土弥生～中世土器
　　２．海辺区出土貝殻・獣骨・鹿角
図版８　丘陵区出土縄文式土器・土錘・鉄器・石鏃
図版９　丘陵区出土弥生式土器
図版10　丘陵区出土製塩土器・土師器・須恵器・近世陶磁器

Ⅰ．は　じ　め　に

1．位置と環境(図1)

島地貝塚は，倉敷市玉島八島島地に所在する縄文時代～中世の貝塚である。島地はその名のように江戸時代後半まで内海の島であった。周辺は新田開発によって陸化したもので，現在は水田・蓮田になっている。それに対して島地はほとんど果樹園となり，宅地化も急激に進行中である。この島地には島地貝塚の他に中世の島地北貝塚，同じく乗越貝塚，同じく七島東貝塚が知られている。

そして対岸の陸地部分には数多くの貝塚，窯跡・古墳・散布地等の遺跡が散見される。例えば西方の道越にはすでに消滅している中世の要害山城址，北方の道口には縄文～中世の月の木貝塚，八島には中世の亀山焼を焼成したと思われる神前神社窯址と大日窯址，やや南に前方後円墳で埴輪を出土した天王山古墳，縄文式土器を出土した浜遺跡，中世の浜貝塚等が知られている。（註1）

1．島地貝塚
2．島地北貝塚
3．乗越貝塚
4．七島東貝塚
5．要害山城址
6．月ノ木貝塚
7．神前神社窯址(市)
8．大日窯址
9．天王山古墳(市)
10．浜貝塚
11．浜遺跡

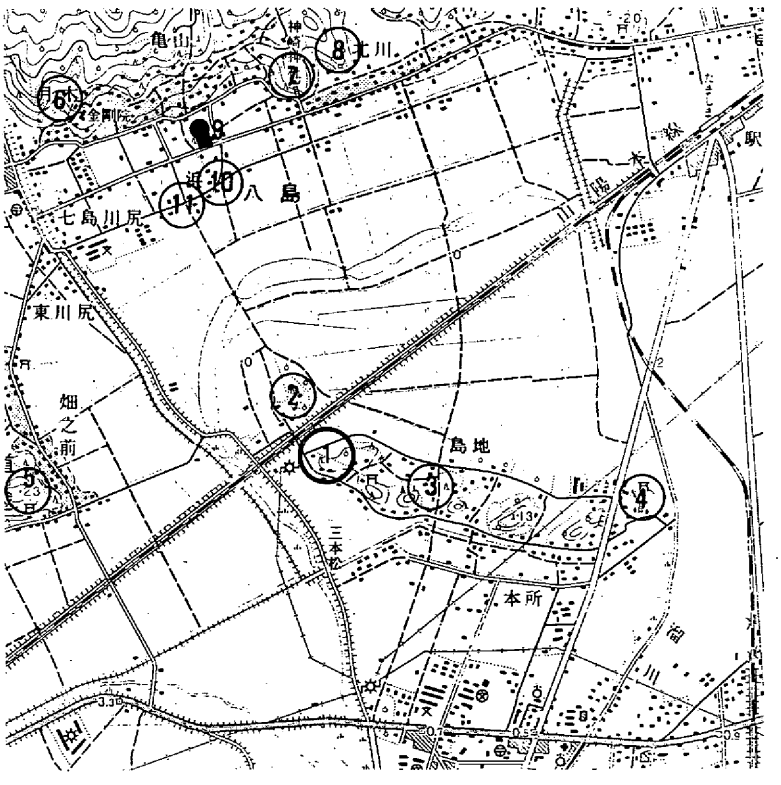


図1．島地貝塚と周辺の遺跡

2．調査に至る経過

このような環境の中に島地貝塚は存在しているが，古くは昭和初期に縄文前期～弥生前期の遺物が

出土して注目され(註２)，後に鎌木義昌氏らが発掘調査した(註３)。そして近年山陽新幹線建設に伴う発掘調査で縄文前期～中世にわたる遺物が採集され報告されている(註４)。しかしこの貝塚は山陽本線の建設に際して本体と考えられる低丘陵部分を地下げしていることから既に消滅していると考えられていた。山陽新幹線はこの在来線の北側であったためこの点を確認することは出来なかった。今回の玉島バイパスは南側の丘陵地がほとんど路線内に入ってしまうことから貝塚の範囲と有無が明らかになることが期待された。

３．調査の経過と日誌抄(図２)

調査対象は海抜７～10ｍの東側丘陵，中央の谷部，海抜５～７ｍの西側丘陵及び西端の海抜０～１ｍ地区と大きく４ブロックに区別できる。調査はまず遺跡の有無を確認するため東側丘陵からトレンチを設定していった。トレンチは幅２ｍでセンター杭を基準として南北に丘陵北端から路線幅いっぱいに取った。したがって長さは一定していない。この丘陵は桃・梅・ブドウ等の果樹園であったらしいが現在は東側斜面から次第に孟宗竹が繁茂して発掘は困難を窮めた。しかし耕作土を除去するとすぐに洪積層の地山が現われたため調査は確実に進行していった。当初10ｍ毎に設定していたトレンチを途中から20ｍ毎に変更したのはＴ１～５まで全く同じ状況であったからである。西側丘陵のトレンチでは若干の弥生式土器が出土したため３本設定した。つづいて海抜０ｍ地区でも沢山の貝塚とともに一握りの土器が採集された。

そこで一応遺跡の有無と範囲が確認できたので対策委員会を開催して報告し，建設省と協議した。協議の結果，遺跡の範囲が西側丘陵区（丘陵区と呼称する）及び海抜０ｍ地帯（海辺区と呼ぶ）の合計約400㎡であり，１ヵ月もあれば調査が出来る見込みであることからそのまま調査を続行することを決定した。

１週間ほど準備期間を置いた後，丘陵区の表土排除を重機を使用して行った。作業員の数が少なく竹の根がからみあって発掘に難行したトレンチ調査から考えれば，竹の根を除去して後は極めて順調に調査は進んだ。丘陵区の調査は３週間弱で終了した。

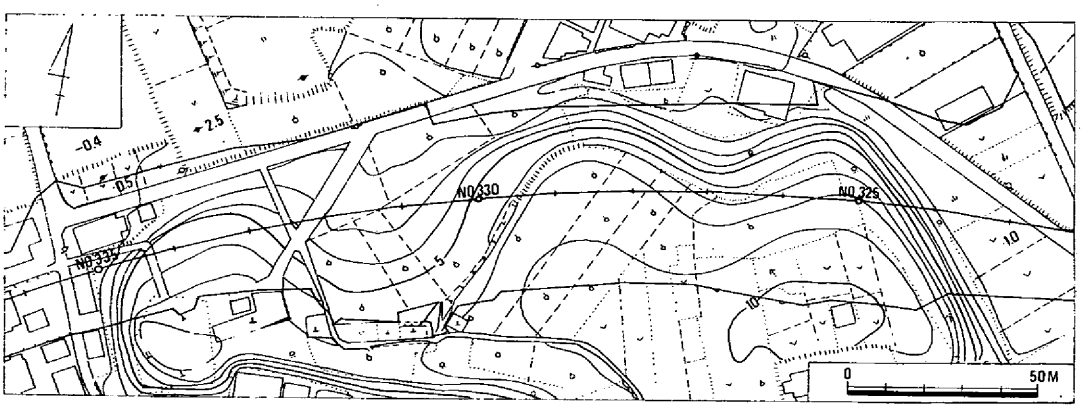


図２．島地貝塚地形図

海辺区はトレンチ15の掘り上げた土を重機で道路の南側に移動させてから，トレンチと道路の間及び北側三角地帯の遺物を採集する目的をもって約１週間で終了した。

発掘が終了した直後に対策委員会を開催して成果の報告を行った。

日誌抄

8月18日(月)　発掘道具の搬入，作業員に対して調査開始のあいさつ及び作業要領の説明。

8月19日(火)　Ｔ－１を設定し，発掘を始める。

8月27日(水)　Ｔ－７からサヌカイト製石鏃が出土。

9月4日(木)　第１回対策委員会開催。

9月26日(金)　Ｔ－15の断面を実測してトレンチ調査を終了した。以後しばらく現場を休業し，拡張区の調査準備を行う。

10月6日(月)　調査再開。重機により丘陵区及び海辺区の表土・排土の除去作業後，丘陵区発掘を始める。

10月22日(水)　丘陵区の調査終了し，海辺区の調査始める。

10月28日(火)　第２回対策委員会開催。

10月29日(水)　発掘道具の徴収作業。

Ⅱ．調　査　概　要

１．トレンチ調査(図3･4)

トレンチは，全部で15本を数える。幅２ｍで長さは長いもので48ｍ，短いもので15ｍを測る。これは調査の経過の中で述べたように任意に設定したためである。内訳は，東側丘陵上に８本，中央の谷に３本，西側丘陵上に３本，海抜０ｍ地帯に１本となる。その他にボーリンクを２ヵ所入れて見た。

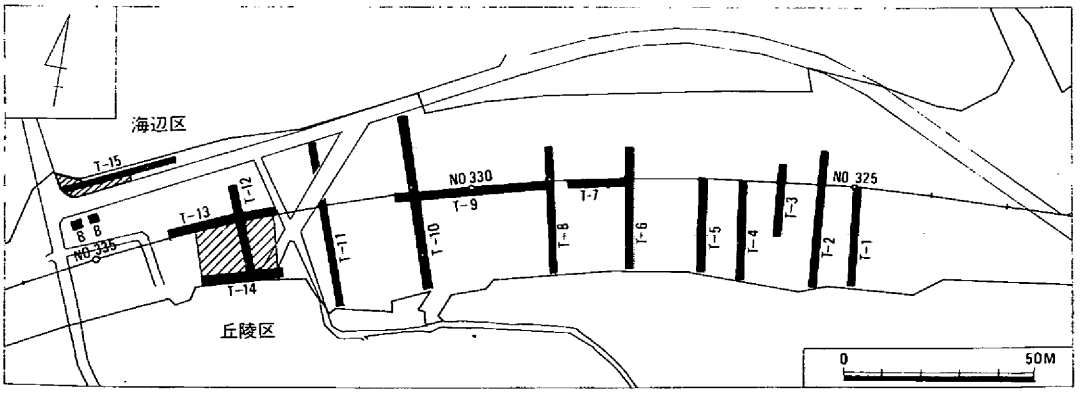


図３．島地貝塚トレンチ設定図及び拡張区

東側丘陵部に設定したＴ－１～８は耕作土平均20cmを掘り下げるともう洪積層の地山に到達し，耕作土中には現代の遺物しか含まず，地山面には現代の肥料穴とか排水溝とかゴミ穴が認められる。例外としてＴ－７の耕作土中からサヌカイト製の石鏃が発見された。

谷部に設定したＴ９～11では，斜面は畑作土を除去すると洪積層の地山に到達したが，Ｔ－10の北端では耕土層下に約40cm程の厚さで砂が堆積しており，その中に古墳時代と考えられる須恵器片が１点含まれていた。

西側丘陵部に設定したＴ－12～14は前二者とは少し趣が異っている。この部分は竹やぶであったから表土は数cmもないいわゆる竹の葉の腐植土であり，その下層は黄褐色のさらさらした砂混り粘土で約20cmの厚さに堆積している。この２層目の下方に弥生後期の甕形土器が土圧で押しつぶされたような状態で検出された。その他の土器片もほぼこの第２層中から採集されている。この層が遺物包含層であることは明らかだが遺構内の堆積土かどうかトレンチでは明確に出来なかった。さて第３層は同じ色調を呈するが地山中の円礫を少し含む土で遺物は全く包含しない。この下は洪積層の山砂利・礫を含むやや赤味を帯びた地山であるから，第３層も洪積層で色調だけ第２層に影響を受けたものであろう。

海抜０ｍ地帯ではＴ－15と２つのボーリングを設定したが，２つのボーリングの方では約50cm程掘り下げたが全く何も出土しなかった。Ｔ－15は比較的ゆるやかに傾斜する畑に２cm幅が土置き場確保のために取れなくて，1,5ｍ幅で設定した。第１層は灰黒色の耕作土で指頭大以下の小石が土よりも多いくらいに含まれていて，その中に縄文式土器細片とハイ貝・カキの貝殻を伴っている。第２層は灰褐色砂質土で新しい時期の溝の埋め土である。第３層は明灰黄褐色砂質土で床土を形成している。第４層は茶褐色砂礫層でさまざまな貝類の小さくなった破片と縄文時代～中世の土器片を包含している。第５層は淡褐色礫層で上層よりやや大きめの貝殻と縄文時代～弥生時代の土器片を包含している。

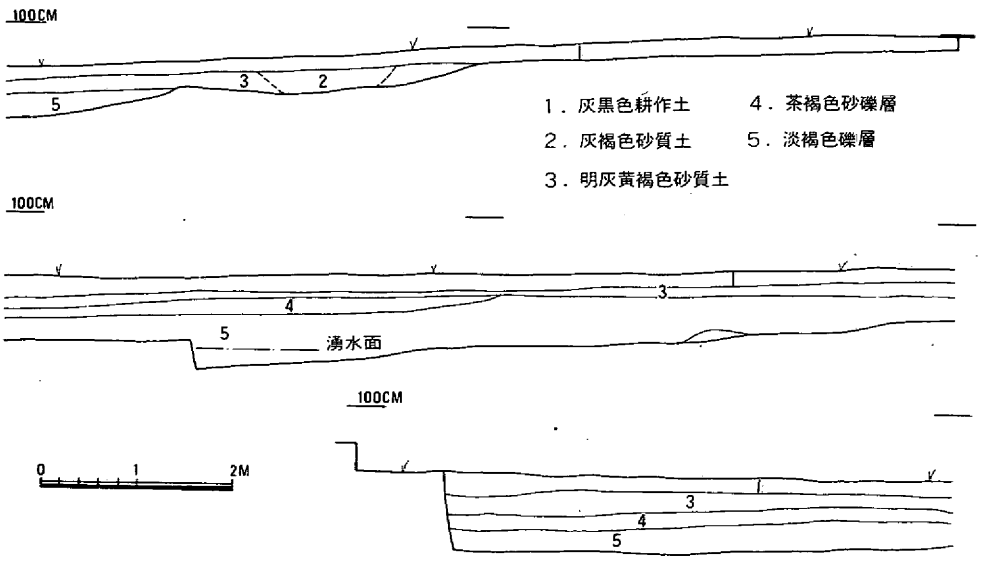


図４．島地貝塚Ｔ－15土層断面図

2．海辺区(図3・4)

トレンチ15を含む市道の北側用地内を海辺区と呼称した。海抜は地表面で1m～60cm程しかなく，現在でも玉島にある樋門がもし破壊でもされようものなら満潮時には1m以上も水没してしまう地域である(註5)。したがって当然江戸時代後半の新田開発以前の遺構はない。ただ海辺に打ち上げられた貝殻とか陸地化したために死滅した貝類が大量に出土したのは当然であろう。そして土器にしても例えば縄文式土器が40点くらい出土しているが，全て塩分と鉄分の影響を受けて暗茶褐色に変色し，硬化している。カキの貝殻が付着している土器もかなり見られた。ここの市道が初めて建設された昭和初期に切り通しの部分で縄文式土器が発見されている(註6)。現在その部分の地面の海抜を推定すると約2.5m～3.0mと考えられる。現在の内海の満潮時でも潮をかぶらない高さである。

3．丘陵区(図3)

T－13・14に囲まれた部分を丘陵区と呼称した。約300m²ある。トレンチ調査でほぼ遺物の包含層の深さが判明しているので一息にその深さまで掘り下げた。遺物は全域から採集できた。しかし第3層上面で遺構検出を行ったけれど新しい時期のゴミ穴しか見つけることが出来なかった。更に第3層も除去して遺構を検出したけれど全く見付けることができなかった。出土遺物から考えると4つの時期に人間の生活した臭いがする。縄文時代の前期と弥生時代の終末期と古墳時代の後期と江戸時代の後半期である。

Ⅲ．出　土　遺　物

1．海辺区出土遺物

海辺区の出土遺物は縄文式土器，弥生式土器，土師器，須恵器，瓦質土器等の土器と，二枚貝，巻貝等の貝殻と，獣骨，鹿角がある。総量は整理箱(註7)にかるく6箱である。土器の量の比率は，縄文式土器約40%，弥生式土器約50%，土師器約4%，須恵器約5%，瓦質土器約1%位に成っている。貝殻は，すべて海水産のもので，ハイガイ・アサリ・カガミガイ・オオノガイ・カキ・オキシジミ等の二枚貝類と，テングニシ・オニニシ・レイシ・ウミニナ・ネコガイ等の巻貝類が見られる(註8)。泥海・岩礁岩上着生と様々な生活場所からこの海岸に打ち上げられたものと考えられる。二枚貝などは完品のものが多いことから陸地化直前まで生きていたものと推定できる。獣骨は少量であり，鹿角は火を受けているものがある。以下土器について少し説明を加えて行きたい。

縄文式土器（図5・6，図版5・6）

縄文式土器は海辺区では弥生式土器に次いで出土している。図示できたものは，口縁部・底部の他は体部でも特徴のあるもの即ち縄文のあるものとか爪形文，刺突文，撚糸文等が明確に見える土器片である。したがって他に条痕文がある土器片とか粗製土器片などは略した。しかし一応前期・中期・

後期・晩期の土器を分類して示した。実数の上では後期・晩期の粗製土器が最も多い。

1は深鉢形土器のくびれ部で器壁の厚さが5㎜ある。表面は棒状工具による連続刺突文が数段施され，裏面は二枚貝による条痕が横走している。褐色から黒色を呈し，1㎜以下の砂粒を含む。羽島下層式土器（註9）と考えられる。

2は深鉢形土器のくびれ部から上方であろう。器壁の厚さは5㎜ある。器面は内外ともにきれいにナデ調整され，外面にC状の連続爪形文が横S状に施されている。暗褐色から黒色を呈し，0.5㎜以下の砂粒を含む。磯の森式土器（註10）であろう。

3は内湾する体部の破片で器壁の厚さは4㎜しかない。内外面ともナデ調整し，外面にはD状（天地逆ならC状）の連続爪形文が施されている。暗茶褐色を呈し，2㎜大の砂粒を含む。これも磯の森式土器であろう。

4は深鉢形土器の底部でかなりのあげ底を呈している。器壁の厚さは5㎜で薄い。外面は横方向の条痕文を施し，内面は砂粒でざらついているのではっきりしないが縦方向の条痕のようである。胎土は底部であるためかやはり砂粒が多く，しかも3㎜大と大きい。暗茶褐色ないし茶褐色を呈す。羽島下層式土器であろうか（註11）。

5は深鉢形土器の大きく波状に曲った口縁部である。口縁端部には深い刻み目を施している。器壁は極く薄く3㎜しかなく，指頭による凹凸が内外面ともに多く観察される。器面は無文で滑らかである。茶褐色を呈し，胎土中には1㎜以下の砂をほんの少量しか含まない。このような特徴をもつ土器は彦崎Z1式土器に見ることができる（註12)。

6は体部破片である。器壁は3㎜しかなく，凹凸が著しい。外面には単節の斜行縄文が施され，内面は粗いナデ調整である。内面は黒色で外面は黒褐色を呈す。胎土中には1.5㎜大の砂粒を少量含む。この特徴は里木Ⅰ式土器に見られる(註13)。

以上1～6は縄文時代前期に属す。

7は口縁部の破片で端部を備前焼の玉縁状に肥厚させている。器壁の厚さは6㎜ある。外面には条に対してかなり斜めの節をもった撚糸文を施し，内面はナデ調整である。撚糸文は里木Ⅱ式土器の特徴である。(註14)。色調は茶褐色から灰茶褐色を呈し，胎土中には1.5㎜大以下の砂粒を多量に含む。

8は体部破片で器壁の厚さは7㎜あり，外表面に撚糸文を施し，内面はナデ調整している。暗茶褐色を呈し，1㎜以下の砂粒を多量に含む。里木Ⅱ式土器である。

7・8は縄文時代中期に属する。

9は口縁部片で端部を肥厚して内側に折り曲げている。2本の沈線の間に縄文が見える。擦消縄文は直線化しているが沈線が2本であることから福田KⅡ式土器（註15）の特徴と少し異っている。地方色なのか時期差なのか判らない。内面はていねいなヘラ磨きである。直径7㎜の円い穴を持っている。黒褐色を呈し，2～3㎜大の砂粒を極く多量に含んでいる。

10は口縁端部を少し肥厚して断面が三角形を呈する土器である。円外ともにていねいに研磨しており，赤褐色を呈して，胎土には1㎜以下の砂を多量に含んでいる。彦崎KⅠ式土器（註16）かあるいは原下層式土器（註17）か不明である。

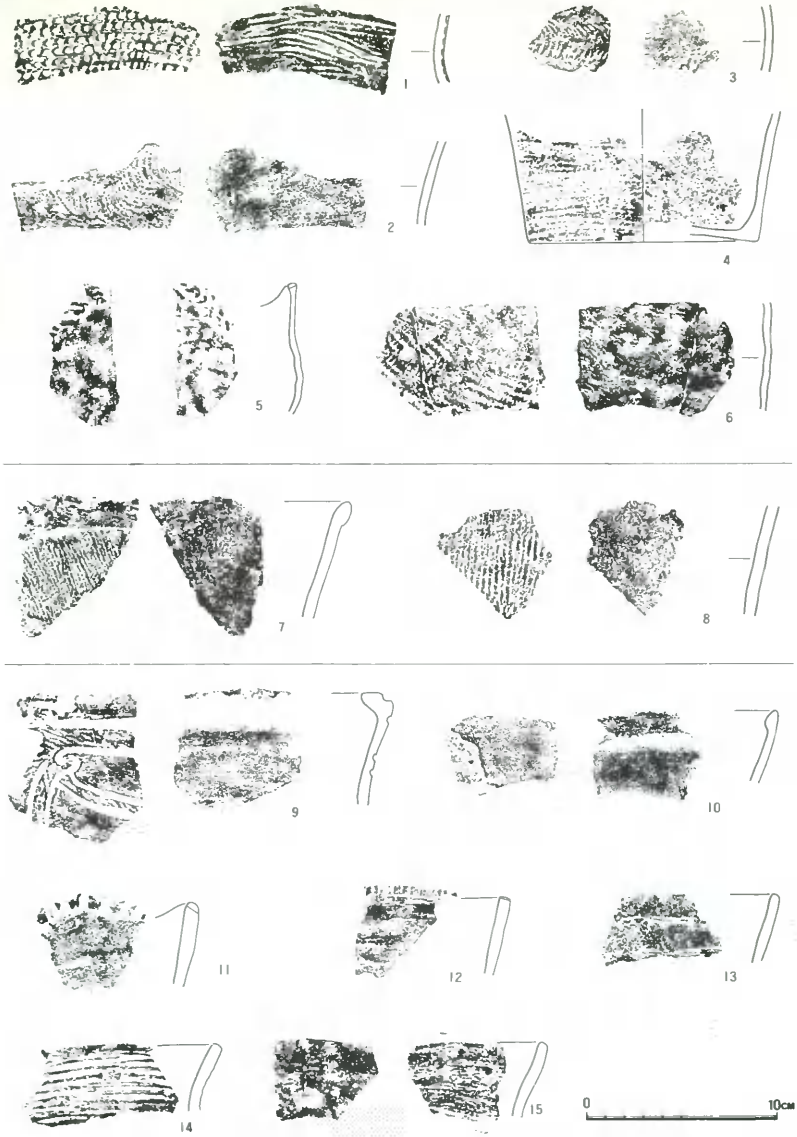


図5　島地貝塚海辺区出土縄文式土器(1)

11は波状口縁を持つ土器で端部に深い刻みを施している。外面にはよく見るとヘタナリ条痕が認められ，内面はナデ調整される。黒色を呈し，胎土中に1㎜大の砂を多量に含む。彦崎KⅠあるいはKⅡに似たものが見える。

12は口縁端部に浅い刻みを施している内外面とも研磨する土器で暗茶褐色を呈す。

13は外面に二枚貝条痕が見られる暗茶褐色を呈す土器である。

14は外面に二枚貝条痕を施している黒褐色を呈す土器である。

15は内面にヘナタリ条痕のある暗茶褐色を呈する土器である。

16は内外面にヘナタリ条痕を施した土器で，内面黒色，外面茶褐色を呈する。

17は口縁端が平担でやや内湾する器形の黒褐色を呈す土器で，広江・浜C類に類似する（註18）。

18は口径が約24㎝と判明する土器で，内外面ともヘナタリ条痕を施し，口縁端部を少し細目につくる。彦崎KⅡ式土器の特徴をもっている。

19は口径が約18㎝を測る暗茶褐色を呈する土器で，口縁端部を少し肥厚させている。内外面ともヘナタリ条痕を施している。彦崎KⅠ式土器と考えられる

20は口径18㎝を測ることができる土器で，外面にヘナタリ条痕を施し，内面茶褐色，外面暗褐色を呈する。5㎜大の礫を少しと，微砂を多量に含む。彦崎KⅡ式土器であろう。

以上9～20は縄文時代後期に属すると考えられる。粗製土器は晩期との区別がよく判らない。

21は今回の調査中最大の破片で口径は約34㎝を測る深鉢形土器である。口縁部は大きく外反し，端部に刻みを施している。口縁部と体部の境には棒状工具によって押し引きした刺突文を横一文字に施している。体部外面には貝殻条痕と削り痕を施し，内面はていねいなナデ調整をしている。器表面にカキ殻と鉄分が付着していた。色調は内外面とも黒褐色から暗茶褐色を呈し，胎土中には1.5㎜～2㎜大の砂粒を多量に含む。原下層式土器に類似している。

22は口縁部と体部との境にC状の爪形文を横一文字に施している土器片で，内外面ともていねいなナデ調整を行い，黒色から黒褐色を呈し，3㎜大以下の砂粒を多量に含む。これも原下層式土器に属すると考えられる。

23は口縁部と体部の境が単に段を有するだけで文様の無い土器である。口縁部の内外面と体部内面はていねいなナデ調整を行い，体部面は二枚貝条痕を施す。色調は内面が淡褐色で外面が暗褐色を呈す。砂粒を含まない。原下層式土器に属すると考えられる。

24は直立する口縁部片で，口縁端部はややとがらしている。少し下った所に断面三角形の凸帯を貼り付け，凸帯には指頭による刻みを施している。内面は横ナデ調整を行い，外面は凸帯から下方に巻貝による条痕が施されている。色調は内面が黒色で外面が茶褐色を呈する。胎土中には2.5㎜以下の砂を多量に含む。この土器は原下層式土器かあるいは黒土BⅡ式土器（註19）に属すると考えられる。

25はかなりあげ底をした底部片で，外面は二枚貝による条痕を施し，内面はナデ調整を行っている。内外ともに暗茶褐色を呈している。胎土中には5㎜大の礫も含み，砂粒は多量に含んでいる。原下層式土器であろう。

以上21～25は縄文時代晩期に属する土器である。

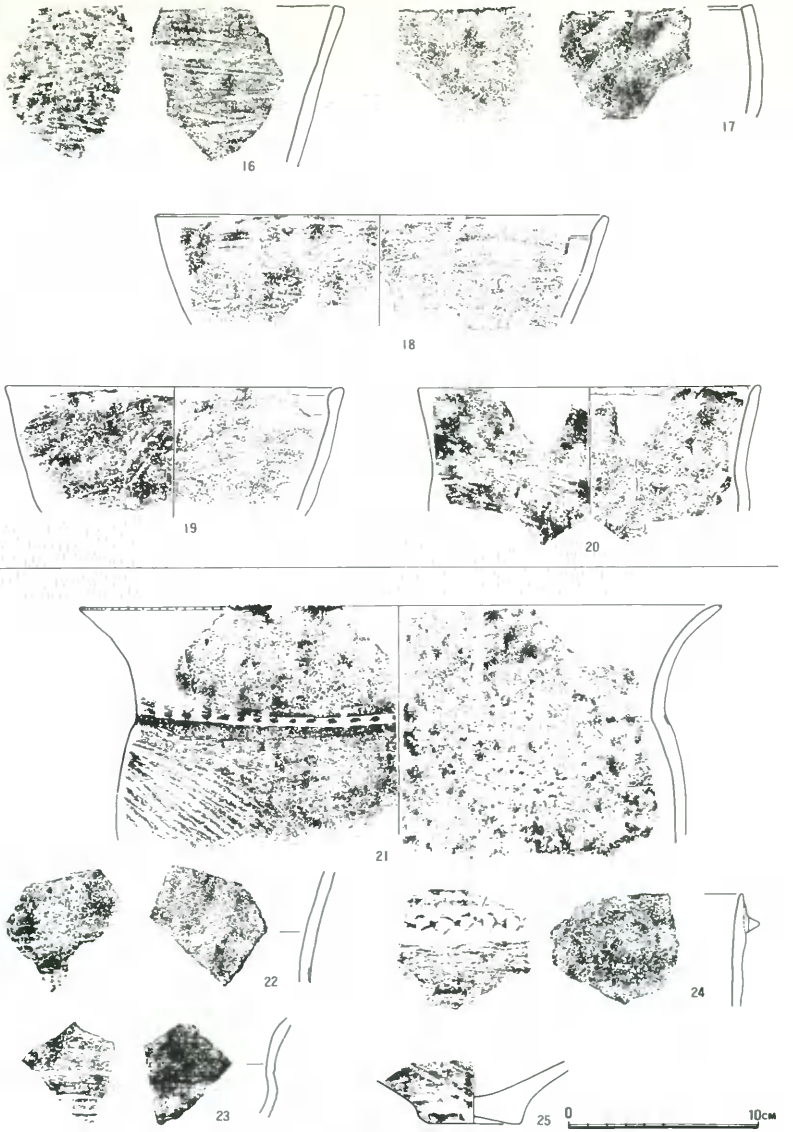


図6．島地貝塚海辺区出土縄文式土器(2)

弥生式土器（図７・図版７）

弥生式土器は海辺区では最も出土量が多い。しかし図化できる程のものは少なく12点しかない。壺・甕・高杯等が見られる。いずれも弥生の終末期の土器である。後述する丘陵区の弥生式土器と全く同じ時期のものと考えられる。

26・27は壺形土器である。二重口縁を形成し，立ち上りは垂直で，端部は丸く収める。26の外面は丹を塗っている。27の内面は横刷毛調整を行っている。いずれも体部内面は篦削りしている。体部外面は調整が表面剥離のため不明である。

28は垂直に立ち上る口縁端外面に７～８条の櫛描平行沈線文を施した甕形土器である。体部外面は縦方向の刷毛調整を行っていて，内面は横方向の篦削り調整をしている。

29・30は口縁端部を上方につまみ出した甕形土器の口縁部片である。29の内面は粗い横方向の刷毛調整，外面は横ナデ調整を行っている。30の外面には篦による圧痕が認められる。

31～33はくの字状に外反する口縁部をもった甕形土器である。31の口縁は少し内湾気味である。体部外面は刷毛調整，体部内面は篦削り調整を行っている。

34・35は平底を呈する底部片である。34は壺であろうか。外面は刷毛目と篦磨きを併用している。35は甕であろうか。内面には刷毛目の痕跡が残っている。

36は高杯形土器の口縁部である。大きく外反している。内外ともに横方向の篦磨き調整を行う。

37は直口壺形土器であろうか，器形の判明しない土器片である。内外面ともに丹塗りしている。

土師器・須恵器（図７・図版７）

土師器及び須恵器は極く少ない。その中で実測できたものは５点である。土師器３点，須恵器２点ある。これらは同一の時期に属すると考えられる。即ち陶邑Ⅰ－３期に当る(註20)。丘陵区の須恵器も同じ時期であろう。

38はくの字状に外反する口縁部を持った土師器の甕形土器である。端部は水平な面に凹みを持っている。口径は約16cmを測り，器表面は全てナデ調整している。体部内面は篦削りの後ナデ調整を行っている。塩分と鉄分の影響で色調は暗茶褐色に変色を受けている。

39はほぼ直立した口縁部をもつ製塩土器である。口縁部の内外面に平行の叩き目が見られる。体部はナデ調整を行っている。黒褐色を呈し，0.5mm以下の砂粒を多量に含む。

40は外面に39よりも細かい平行の叩き目を持つ製塩土器の体部片である。

41は須恵器の杯蓋の細片である。口径は約12cmを測る。天井部と口縁部の境は突出して鋭い稜をなし，口縁部は高く2.5cmを測る。口縁下端部はほとんど水平で凹みを持つ。胎土中に５mm大の礫も含んでいる。

42は甕形土器の口縁部で，大きく外反し端部に近い位置に断面三角形の凸帯を巡らし，その下に櫛描波状文を施す。口径は約24cmを測る中型甕である。

中世土器（図７・図版７）

かつてはかなり出土していると聞いているが(註21)，今回はたった１点しか出土していない。

43は瓦質土器で，鉢形土器になると考えられる。少し内湾して端部は外傾する面を作っている。

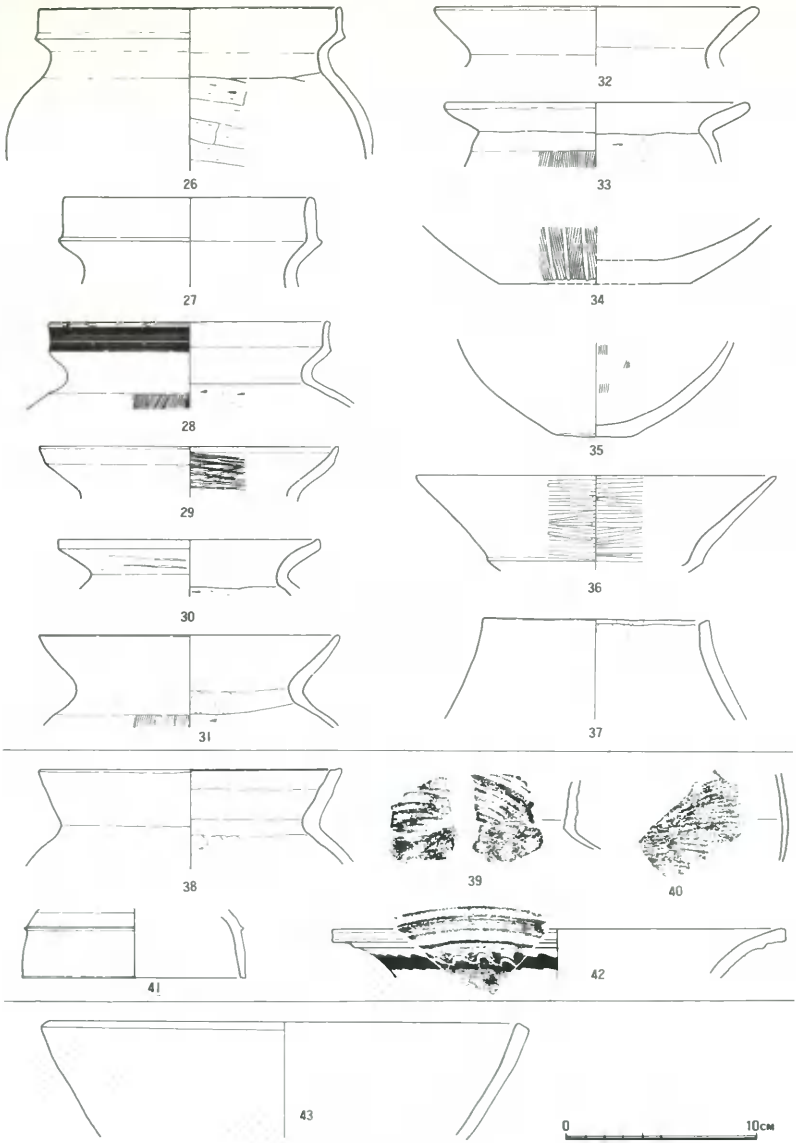


図7．島地貝塚海辺区出土土器

２．丘陵区出土遺物(トレンチ出土遺物も含む)

丘陵区では縄文式土器片３点と弥生式土器多数及び須恵器片若干と土師器少々，中世土器僅少，近世土器数点が出土している。そのうち実測可能な土器は全て実測し，図示した。その他に土錘が２点と用途不明の鉄器片１点及びサヌカイト製石鏃が１点出土している。以下順次説明を加えていきたい。

縄文式土器（図８・図版８）

縄文式土器は丘陵区全体にたった３片しか出土していない。そしてその３片とも同一個体と考えられる。表裏ともに二枚貝による条痕を施している。色調は内面が黄褐色で外面は褐色を呈し，胎土中には２㎜以下の砂粒を多分に含む。**44**～**46**である。羽島下層式土器に属するものと考えられる。

弥生式土器（図８・９・10，図版９・10）

弥生式土器は丘陵区の遺物のほとんどを占める。壺形土器・甕形土器・高杯形土器・鉢形土器・製塩土器・手焙形土器等が出土している。実測は50点を数える。

47・**48**は短い頸部を持った壺形土器片で，二重口縁を形作るが立ち上り部分を欠いている。体部内面は箆削りしているが，外面は47が箆磨き，48は刷毛目である。

49・**50**は広口壺形土器というべきものか。大きく外反する口縁部を持ち，体部をほぼ球形に作る。体部内面は箆削りし，外面には刷毛目を施している。

51はくの字状に外反する口縁の端部を上方に拡張した甕形土器である。口縁部内外面に刷毛目が残っている。体部内面は箆削り，外面はよく判らない。

52は口縁部が二重口縁を形成し，立ち上り外面には凹線文が施されている甕形土器片で，体部内面が箆削り，外面が刷毛目と箆磨きの併用である。器壁の厚さは３㎜程しかない。

53～**55**は凹線文のかわりに櫛描平行沈線文を施している。沈線の数は５～６条である。体部内面は箆削りだが最大径から下方は指頭圧痕が無数に残っている。外面は縦方向の刷毛調整を行う。

56は口縁端部を上方に少し拡張している甕形土器で，体部最大径はかなり上方にあって肩が張っている感じである。体部内面は上半が横方向，下半が縦方向の箆削りで，外面は刷毛調整をしている。

57～**59**は外反する口縁を持つ甕形土器で，57はやや内湾気味，59はやや外湾気味である。体部内面はいずれも箆削りで，外面は判らない。

60～**63**はくの字状に外反する口縁を持つ鉢形土器である。口縁部内外面は横ナデ調整が普通だが，61は横方向の刷毛目，63は指頭圧痕が残っている，体部内面は60・61が指頭ナデが認められる。体部外面は60が横方向の刷毛目，61が縦方向の刷毛目である。

64～**67**は底部片である。64は壺形土器，65・66は甕形土器，67は器形が判断できない。66はわずかに平底を残している。64を除けばいずれも内面に指頭圧痕が無数に残っている。

68～**70**・**73**は丸く内湾気味に立ち上る杯部を持つ高杯形土器である。70は内外とも丹塗りが施されている。いずれも内外ともナデ調整を行っている。

71・**72**は口縁部が外反する杯部を持つ高杯形土器である。内外面とも横ナデのように見えるが，箆磨きの可能性もある。

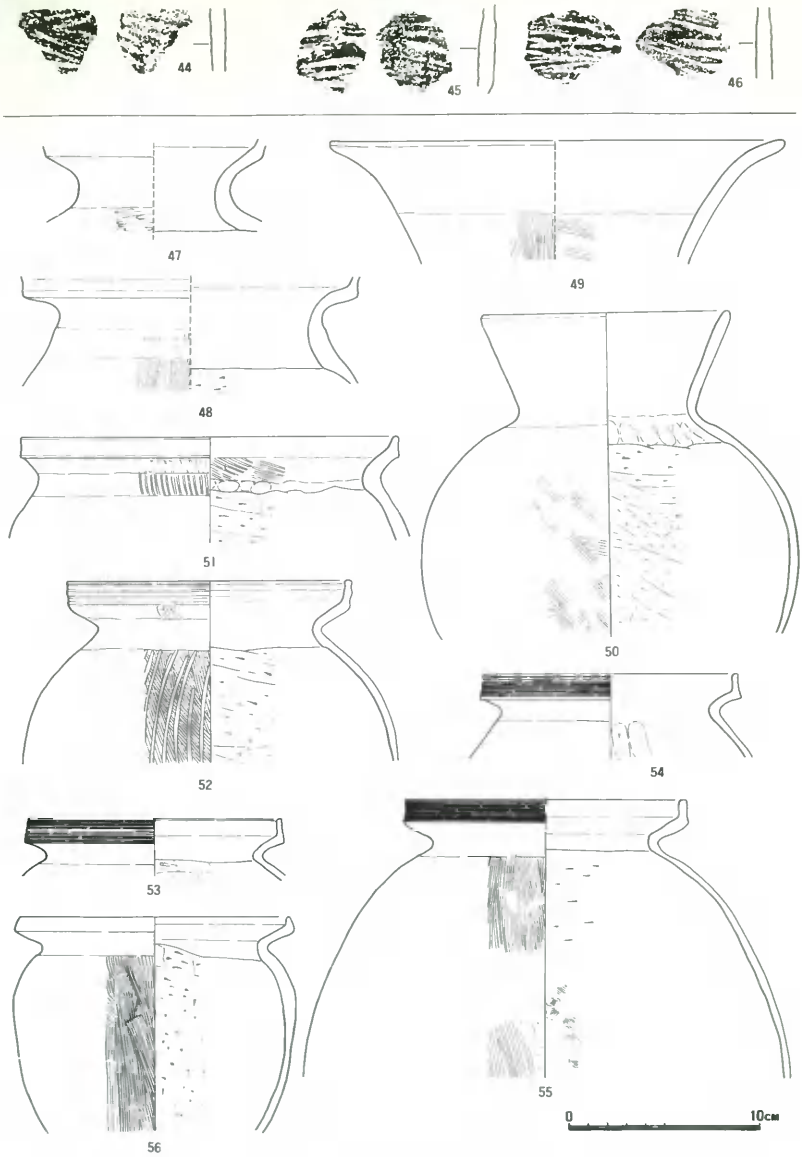


図8．島地貝塚丘陵区出土土器(1)

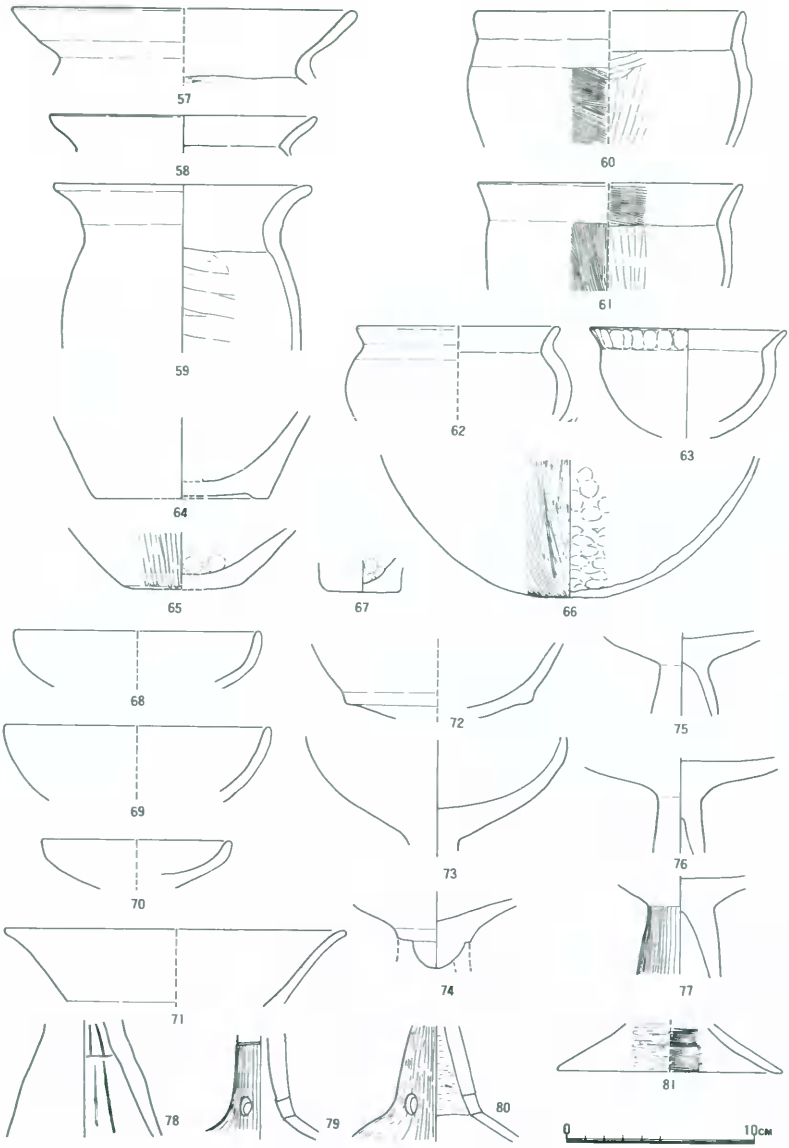


図９．島地貝塚丘陵区出土土器(2)

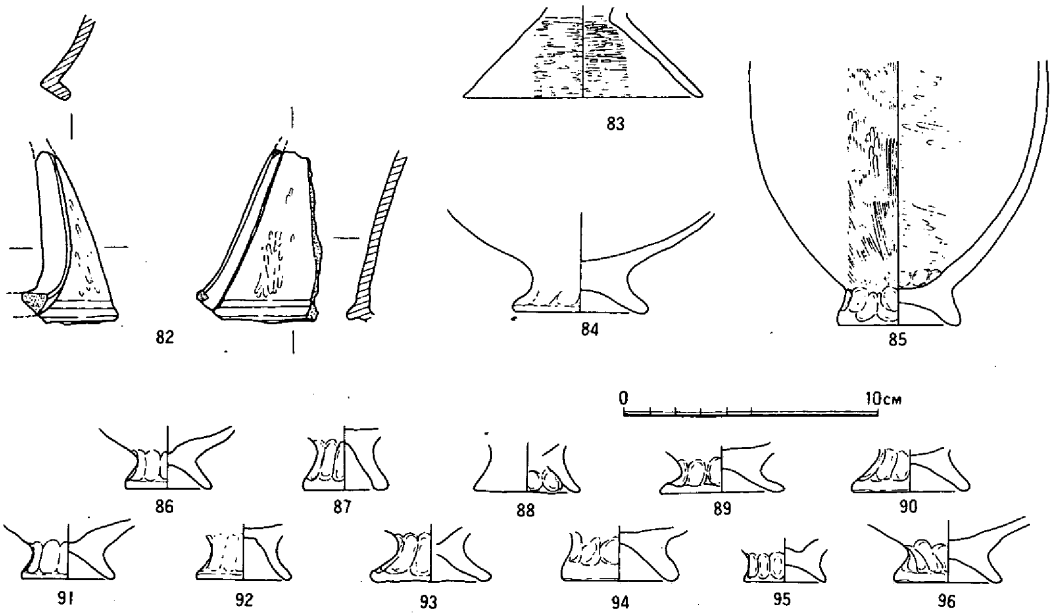


図10．島地貝塚丘陵区出土土器(3)

73～78は高杯形土器の脚部及び裾部であり，すべてやや長脚を呈する。脚部に３個の円孔を穿つものが２点ある。78の内面にはしぼり目が残る。77・79・80の外面は縦方向の箆磨き，80の内面は箆削り，81の外面は横方向の箆磨き，81の内面は横方向の刷毛目が施されている。

82は手焙形土器の破片と考えられる。色調は内外ともに暗黄褐色を呈し，胎土中には0.5mm以下の砂粒を少し含み，金雲母も少し含む。外面には縦方向の箆磨きの痕跡が若干残り，内面は最終的にはナデているようだ。図は正面図と側面図及び断面図である。

83は器形不明の土器で八の字状に広がる台になる。内外面とも非常に細かい横方向の箆磨き調整を行う。色調は赤茶褐色を呈し，胎土は良質な粘土を使っている。

84・85は台付鉢形土器である。84・85の台は製塩土器の台と形態，手法が似ているけれど，色調と胎土が全く異なっている。鉢の体部内面は丁寧な横方向と一部縦方向の箆磨き調整で，外面は細かい刷毛目の後若干箆磨きが施されている。色調は84が淡灰黄褐色，85が暗赤褐色を呈す。胎土は84が１mm前後，85は２mm以下の砂粒を少し含んでいる。

86～96は製塩土器の台部である。いわゆるラッパ底を呈している。端部は丸いものと角張るものとがある。底径は3.4～5.0cmとかなりばらつきがある。外面にはいずれも指頭圧痕が明瞭に残っている。色調は褐色～淡褐色あるいは明茶褐色～赤褐色と様々で二次的な焼成を受けているようである。胎土中には１mm大以上の砂粒を外量に含む粗悪な粘土を使用している。

以上の弥生式土器は海辺区出土の弥生式土器と同一時期のものと考えられる。即ち弥生時代の終末期で，平底が次の段階で丸底に転化してしまう時期である。最近の編年案では，上東遺跡の下田所式（註22），雄町遺跡の雄町13類（註23），高橋護氏のIX-C期～X-b期（註24）に比定できる。

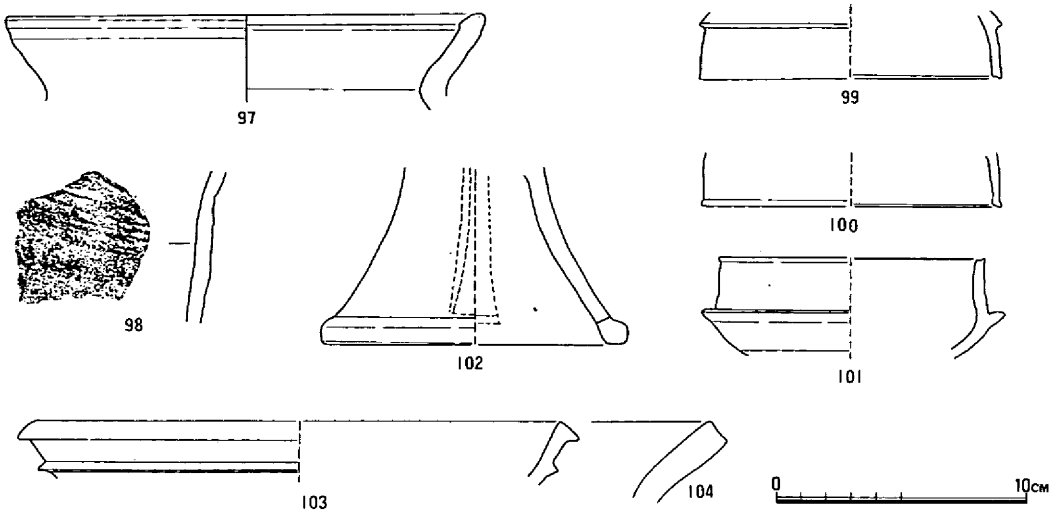


図11．島地貝塚丘陵区出土土器(4)

土師器（図11・図版10）

丘陵区出土の土師器は極めて少ない。そのうち実測できたのは甕と製塩土器片の２点である。

97は八の字状に外反する口縁を持つ甕形土器である。口縁端部を少し内側に押さえることによって肥厚させている。暗黄褐色を呈し，１㎜前後の砂を多含する。内外面に丹が若干残っている。

98は平行な叩き目を外面に施している製塩土器片である。縄文式土器の条痕と見間違うほどよく似ている。二次的焼成を受けて暗紫褐色を呈し，よく焼けしまっている。１㎜以下の砂粒を多含す。

須恵器（図11・図版10）

ここに図示したのは杯・蓋・高杯・中型甕の５点で，時期は陶邑Ⅰ－３期に限定できる。

99・100は杯蓋の細片である。口径は計測できない。天井部と口縁部との境は鋭く突出している。口縁部は2.0cm以上あり，下端は内傾する面をもつ。

101は杯身の細片である。立ち上りはほぼ直立し，2.3cmを測り，端部は少し内傾し凹みをもつ。体部と口縁部の境は外方に７㎜も伸びている。

102は高杯の脚部の破片である。八の字状に広がる脚の端部は肥厚して断面を円形に近く作っている。長方形の透し孔を４ヵ所開けている。外面に暗緑色の自然釉が少しかかる。

103は中型甕の口縁部と考えられる細片である。端部外面とそれから約１cm下方に断面三角形の凸帯を巡らしている。

中世土器（図11）

中世土器と考えられるものは１点しか出土していない。

104は甕形土器の口縁部である。口径は40cm以上になると思われる。内外面とも暗灰色で１㎜大の砂粒を少し含む須恵質の土器である。

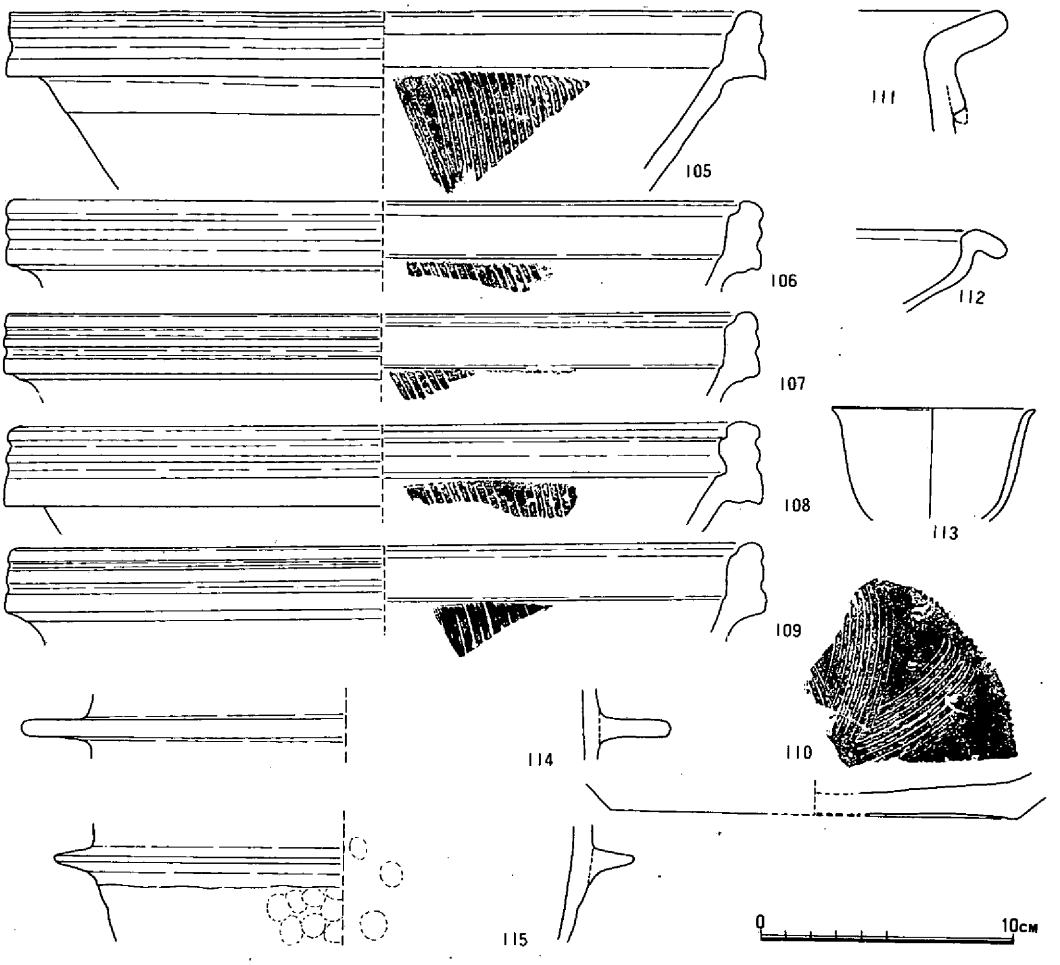


図12．島地貝塚丘陵区出土土器(4)

近世土器（図12・図版10）

近世の土器は備前焼の擂鉢と瓦器の甕・土鍋・羽釜と磁器の碗の合計11点が出土している。備前焼からみて江戸時代後半期（18C以降）に属すると考えて良いだろう（註25）。

105～110は備前焼の擂鉢の口縁部片と底部片である。口縁端部を肥厚してその外面には２本の凹線文をその内面には１本の凹線文をそれぞれ施している。体部内面は下方から上方に７～８本で１組の櫛描条線を全面に引いている。底部内面には放射線状に内から外に向って条線を引いている。色調は淡い赤褐色から暗茶褐色まで焼成の温度差がそのまま出ている。

111は口径50cm以上の大型の甕である。灰褐色を呈し，砂粒をほとんど含まない。

112は土鍋の口縁部片で，淡灰褐色を呈し，0.5mm大の砂粒をほんの少し含む。

113は磁器の碗で，やや緑色を帯びた透明な釉を塗る。釉にひび割れがあり，無文である。

114・115は羽釜の破片である。ススの付着がどちらも著しい。瓦質である。

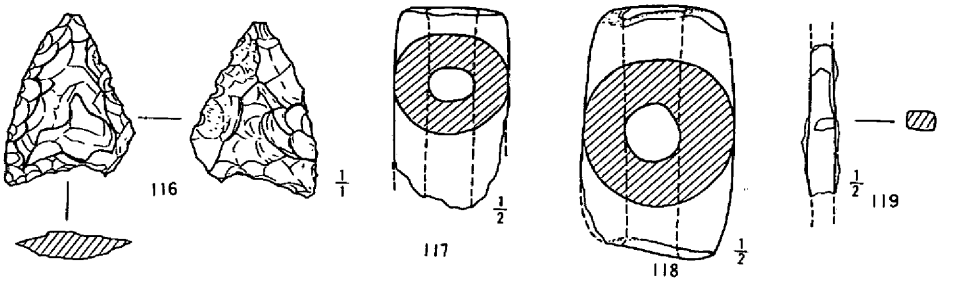


図13．島地貝塚丘陵区出土遺物

その他の遺物（図13・図版８）

116は東側丘陵部のＴ－７で耕作土中にあったものが発掘後雨に打たれて偶然発見したサヌカイト製の凹基式石鏃である。他に共伴遺物はない。時期は恐らく縄文時代に属するであろう。

117・118はいずれも土師質の円筒形をした土錘である。117は少し扁平で，暗褐色を呈す。118は明茶褐色を呈し，ひもですれた痕跡が残っている。弥生か古墳時代に属すだろう。

119は用途不明の鉄器片である。断面形は長方形で何か鉄鏃か鉋の茎のようである。弥生か古墳時代に属すと思われる。

Ⅳ．む　す　び

今回の調査は島地貝塚の本体と思われていた丘陵部を完全に縦断するものであった。(前回の新幹線の位置は島地貝塚と島地北貝塚の境目を横断するものであった。) したがって今回の調査によって縄文時代の島地貝塚の実体がほぼ解明できたと考えている。縄文式土器は海辺区から前期・中期・後期・晩期，丘陵区から前期が出土している。これは新幹線の調査とほぼ同じ成果である。そして貝殻は大量に海辺区から出土している。前回は縄文期の貝層について自然貝層と人工貝層との分離が明確にし得なかったとしている。しかし土器の出土の仕方は弥生式土器～中世土器と混在し，貝殻は食べたと思われるようなものは全く見ることができない。そして海辺区の概要でも説明したように貝殻は土器に付着している。これは明らかに貝層が自然のものであることを物語っている。即ち縄文期の貝塚はもうこの地には残っていないと言える。

次に弥生時代はどうであろうか。昭和の初期には前期の土器が出土し注目されていた。前回も同様である。しかし今回は残念ながら全く見ることができなかった。終末期の土器が両区，特に丘陵区から出土しているが，このことは何を意味するのか。出土土器の中に注目してよいものに製塩土器があることから製塩を行う小集団が短い期間丘陵上に住んでいたことを考えさせてくれる。住居址等の遺構は，恐らく古墳時代かあるいはそれ以後削平されたものであろう。そして同じことが古墳時代後半期にも言えるであろう。

中世には今回は遺物は少ないけれど昭和26年の調査の時にかなり出土していることを聞いている

(註26)。近世になると新田開発によって陸地化してしまうため複雑な様子を示す。

現在の島地は山陽本線・新幹線・市道により南北に分断され，県道と市道によって東西を区切られて，宅地化がどんどん進んで小さな丘がますますやせ細っている。そして今度の一般国道２号線バイパスの建設は島地の７つある丘陵中最大の部分を通過するため現在より約１ｍ程削平され谷は埋められ大幅な変化が起ることになった。その上用地内だけの変化に留らず周辺にもすでに変化が起りはじめている。時の流れは止めることはできないが，少しでもゆっくりと進んでもらいたいと感じるほど島地の変化は著しい。

この報告書を作成するにあたって対策委員の先生方を始め，文化課の友人から幾多の教示を得た。末筆ながら記して哀心より御礼申しあげるしだいである。

註１　倉敷市教育委員会「倉敷市文化財分布図」1975年３月　これ以後沖積地で少し遺跡が発見されている

註２　倉敷考古館「倉敷の古代」1972年

註３　鎌木義昌「岡山県大百科辞典」上　山陽新聞社　1980年

註４　下沢公明「島地貝塚の調査」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書第２集　1974年３月

註５　古老の話によると子供の頃に一度欠壊したことがあるそうだ

註６　註２・註３に同じ

註７　現在使用している県教委の整理箱の大きさは内法で53cm×33cm×15cmである

註８　丹信實「紫雲出山貝層の自然遺物」『紫雲出』香川県三豊郡詫間町文化財保護委員会　昭和39年９月

註９　藤田憲司・間壁葭子・間壁忠彦「羽島貝塚の資料」倉敷考古館研究集報第11号　昭和50年11月

註10　註９に同じ

註11　註９の資料には平底の底部が見られないため疑問である

註12　註９に同じ

註13　註９に同じ

註14　間壁忠彦・間壁葭子「里木貝塚」倉敷考古館研究集報７号　1971年

註15　註２及び註14に同じ

註16　註14に同じ

註17　鎌木義昌・江坂進「岡山県御津町原遺跡」瀬戸内考古学第２号　昭和33年３月

註18　間壁忠彦・間壁葭子・藤田憲司・小野一臣「広江・浜遺跡」倉敷考古館研究集報第14号　1979年８月

註19　註17に同じ

註20　平安学園考古学クラブ「陶邑古窯址群Ⅰ」　1966年

註21　鎌木義昌氏の教示による

註22　柳瀬昭彦・江見正己・中野雅美「上東・川入」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　16　1977年

註23　岡山県教育委員会「雄町遺跡」埋蔵文化財発掘調査報告　1972

註24　高橋護「弥生土器」考古学ジャーナー173　1980年

註25　山陽自動車道の鴨方町益坂で同じような備前焼擂鉢が出土している。また報告書も本書と同時に刊行される予定である

註26　鎌木義昌氏の教示による

1. 島　地　遠　景（東から）

2. 島地近景とトレンチ（東から）

図版2

1. 丘陵区表土除去作業（南から）

2. 丘陵区発掘風景（北から）

1. 丘陵区遺物出土状態（西から）

2. 丘陵区調査後（北から）

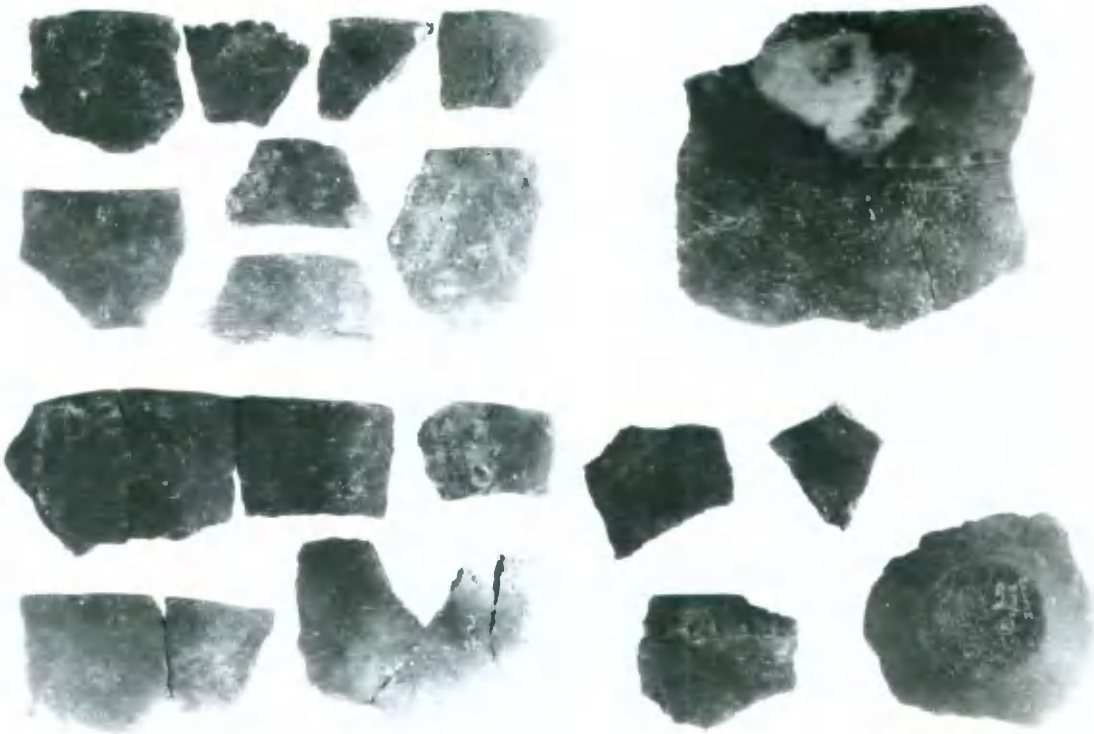
図版4

1. 海 辺 区 ト レ ン チ 15（西から）

2. 海 辺 区 発 掘 風 景（西から）

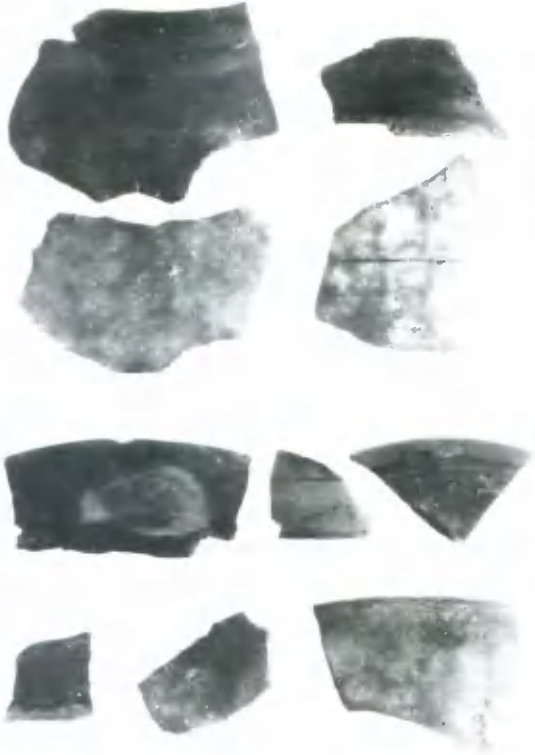
1. 海 辺 区 出 土 前 期 縄 文 式 土 器

2. 海 辺 区 出 土 中 期 縄 文 式 土 器



1. 海辺区出土後期縄文式土器

2. 海辺区出土晩期縄文式土器



1. 海辺区出土弥生～中世土器

2. 海辺区出土貝殻・獣骨・鹿角

図版8

丘陵区出土縄文式土器・土錘・鉄器・石鏃

丘陵区出土弥生式土器

図版10

丘陵区出土製塩土器・土師器・須恵器・近世陶磁器

一般国道２号玉島バイパスの
建設に伴う発掘調査報告書

島　地　貝　塚

1981年　2　月　20　日　印刷
1981年　2　月　28　日　発行

編　集　岡山県教育委員会文化課
発　行　建設省岡山国道工事事務所
　　岡山県教育委員会
印　刷　岡山県出納局用度課